

【主題】児童が自分のよさを自覚し、自己肯定感を高める支援の在り方

【副題】児童の「できた」を認め励ます「ミニ賞状」の活用を通して

宮城県刈田郡蔵王町立円田小学校
校長・若生利幸

1 はじめに

急速な社会の変化の中で、児童一人一人が自分のよさや可能性を認識できるよう、自己肯定感を育むことが現在の学校教育に求められている。この自己肯定感の醸成について本県の状況を見ると、令和2年度宮城県児童生徒学習意識等調査の結果のうち、「先生はあなたの良いところを認めてくれますか」との質問事項に対して、肯定的な回答をする児童生徒の割合が上昇傾向にあり、全県的な改善傾向が見て取れる。

本校は全学年単学級、全校児童87名の小規模校であり、児童一人一人の活動に目が行き届く環境にある。全校児童と保護者を対象として実施した令和3年度学校評価アンケートの結果では、「先生は頑張ったときにほめてくれますか」との質問事項に対して、児童・保護者ともに肯定的な回答をする割合が94%という結果が得られた。ただ、この詳細を経年変化で見ると、最上位の回答をした児童の割合が、R2年度の92%から、R3年度の70%へと大幅に減少していた。

本校児童は自らの役割を果たしたいと意欲を見せている一方、友人関係が固定化されやすく、行動が友達の後追いになったり、何をしてもよいのか躊躇したりする場面が散見される。児童の評価に表れた数値の減少に危機意識を持つと共に、活動意欲の高揚と望ましい行動の維持・向上に向けた取組の必要性を深く認識し、令和3年度の取組について述べていく。

2 研究目標

「ミニ賞状」の有効性について実践を通じて考察し、児童が自分のよさを自覚し、自己肯定感を高める支援の方策を明らかにする。

3 研究の内容及び方法

- (1) 学校課題と児童の興味・関心の対象【実態把握】
- (2) 「ミニ賞状」の有効性【文献研究・記録の累積】
- (3) 効果を高める運用方法【関連する方策の実践】
- (4) 児童・保護者の反応【学校評価等の調査】

4 学校経営方針・重点事項等との関連

(1) ざおう英語活動の推進（教育特区）
インプットとアウトプットのバランスの取れた学習活動を展開し、「プレゼンテーション活動」を自発的に行った児童を認め励ましていく。

(2) 体力・運動能力の向上

外遊びを奨励し、自分の好きな活動（雲梯・登り棒、一輪車等）で上達した児童を認め励ましていく。

(3) 読書活動の推進

定期的な多読賞表彰により読書習慣の定着を図り、継続的に読書に親しもうとする意欲を喚起していく。

5 実践の経過

(1) 学校課題と児童の興味・関心の対象

A6版サイズの「ミニ賞状」の発行は令和3年9月末からである。1学期は学校課題の洗い出しを行うと同時に、児童の興味・関心の対象を調査する予備段階として必要な期間であった。また、課題の背景にあるものとして、コロナ禍における運動不足の解消と、県全体の課題である肥満傾向の改善が挙げられる。

そこで、取り組んでほしい3つの柱を「食欲・運動・読書」とし、2学期の始業式では季節にちなんで「〇〇の秋」という表現を使って児童に伝えることとした。



図1 食育用「ミニ賞状」3種（例）

特に、食育用「ミニ賞状」（図1）は、蔵王町学校給食調理場と情報を共有しつつ、2学期全体を通して一貫した支援を行った。この取組は、いわゆる「完食」を目指すものではなく、あくまでも「おいしく楽しく食べること」を目標にしている。コロナ禍にあって、朝食が徹底される中での取組ではあったが、令和3年

度末には、広報「ざおう」の記事として掲載された(図2)。掲載後、調理場所長より「地域から好評を得た」との知らせがあった。このように、他機関との連携により取組の実際を町内全域に公開することで、児童の自己肯定感を高める契機となった。



図2 広報「ざおう」令和4年3月号より

(2) 「ミニ賞状」の有効性

①可視化 ～賞賛を手にとることができる～

賞賛の声も時間が経てば薄れていき、消失することもしばしばである。図3は、本研究の核となる「ミニ賞状」による効果をイメージとして示したものである。

特に、記憶の保持が難しい低学年の児童にとっては、「特別なものを手に入れた」という印象が残り、「ミニ賞状」という具体物を手にしながら家庭で話題にすることで、記憶の定着度は一層高まる。

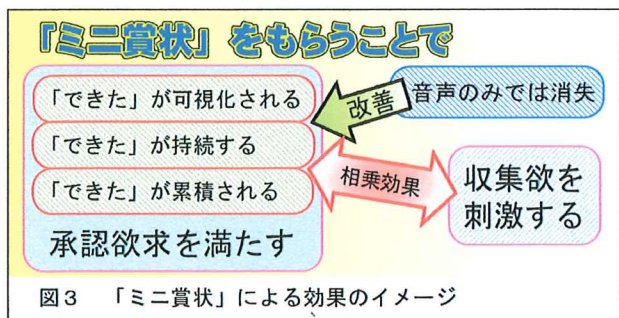


図3 「ミニ賞状」による効果のイメージ

②連続性・継続性

人には物を集めたい欲求がある。本研究では、「ミニ賞状」を集めたい欲求と課題挑戦への意欲が相乗効果を生むよう、その入手しやすさに配慮した。次項のsmallステップにて具体的な場面を記述する。

③承認欲求の充足

誰しも他者から認められたいという欲求がある。自分の「できた」ことを強く実感し、記憶に留め置くために、授与までの数時間～数日程度、校長室前の廊下

に掲示することとした(図4)。掲示された「ミニ賞状」は他者の目に留まり、時には来校した保護者にも認めてもらえる機会となっている。



図4 承認欲求を満たす校長室前の掲示

(3) 効果を高める運用方法【関連する方策の実践】

① ハードルを下げて、間口を広げる

獲得までのハードルが高すぎると、「どうせ手に入らないだろう」と意欲の減退を招きやすい。時には、対象児童全員が入手できる機会を設定することで、「できた」という実感を共有することが大切である。例として、「新しい国語(東京書籍)第5学年の実践で文章を完成させた児童全員に「ミニ賞状」を授与した。

単元名「心が動いたことを三十一音で表そう」

単元名「日本語と外国語」方言と共通語

単元名「伝記を読んで感想文を書こう」手塚治虫

② smallステップで、何枚も入手可能

令和3年度に初めて一輪車に乗ることができた児童に対しては、その距離が伸びるごとに、「5m走行」や「15m走行」といったように複数枚の「ミニ賞状」を授与した。これにより、挑戦したいという意欲を可能な限り持続させることができ、校庭を周回するほどまでに上達した。この距離は決して一律ではなく、児童をよく観察し、意欲の減退が見て取れる場合には、より細かい段階を用意して支援に当たるようにした。

③ デザインを変え、真新しさを演出する

色を変える方策も効果的であった。例えば図5Aのように、赤と青の2種類を用意するだけで、両方入手したいという児童の欲求に訴え掛けることができる。また、図5Bのように、標題は同じでも大幅にデザインを変更したものは好評であった。



図5A 色の変更

図5B デザインの変更

以上①から③の取組を例に、意欲を喚起する運用方法について述べたが、もとよりモチベーションと技能が高い児童に対しては、「プレミアム感のあるミニ賞状」を発行することも考えられる。体育科における跳び箱運動では、第3学年及び第4学年の発展技に示されている「伸膝台上前転」に挑戦した児童に対して、特別な「ミニ賞状」を授与し、次単元や次年度への意欲向上を図った。

(4) 児童・保護者の反応【学校評価等の調査】

賞状を得た喜びが保護者の喜びとなっていることが学校評価アンケート結果（図6）に表れ、成果の一端が見て取れる。また、活動の様子を学校HP上に動画にて公開する際には、校長が電話をかけて保護者から了解を得て、掲載につなげてきた。なお、掲載期間は最長で翌年度末まで、卒業児童の動画は3月末で削除済みである。

(3) 自由記述欄 ※集約、一部抜粋をして掲載
 ・面談等をおして、子どもの学校での様子を担任の先生がいろいろと教えて下さるので助かります。
 ・コロナ禍でまだまだ制限がある中、いろいろ工夫していただき感謝です。また、ホームページに子どもたちの日常の姿をたくさん載せていただき、学校での様子を見ることができてうれしかったです。
 ・まだまだコロナ禍で大変な中、配慮しながらも行事や活動を行ってくださりありがとうございます。
 ・ホームページのたくさんの写真がすごいですね。校長先生からの賞状をととても喜んでいきます。やる気アップ、ありがとうございます。
 ・いつも子どもたちのことを見ていただき、ありがとうございます。

図6 学校評価アンケート結果

6 ざおう英語活動の推進に係る取組

町の特色ある教育活動として「ざおう英語活動」があり、知識や技能の「教授—習得」のみに力点を置かず、コミュニケーション活動を通して「生きて働く英語力」を育てている。

本校では、第3学年以上の児童を対象に、30秒から1分程度のプレゼンテーション動画を作成、保護者の了解を得て学校HPに掲載してきた。第6学年の活動では、行ってみたい国や地域を取り上げて特産品や名所を紹介する活動を、学年末には中学校進学後に取り組みたい部活動や教科を考えてプレゼンテーションを行った。この活動においては、

- ・プレゼンテーション動画の撮影
- ・学校HPでの紹介
- ・発表者への表彰・集合写真撮影（図7）

の段階が複合的に作用し、新たな意欲を生み出す結果となった。児童にとっては、撮影の緊張感を味わう機会となり、撮影を終えると「快」の表情を浮かべる。

これだけでも、児童は「できた」ことを実感するが、第2段階として、学校HPにて14名の動画を公開してきた。そして、第3段階として、表彰式と集合写真の記念撮影を行った。

英語学習指導員からは、「6年生のMさんは、あのプレゼンテーションから変わった」との評価を得ている。今回の研究主題にある「自分のよさを認める」ことができた実感する場面であった。



図7 ざおう英語活動 プレゼンテーション表彰

7 運動機会の充実と「ミニ賞状」

体力・運動能力の向上に向けた外遊びの奨励では、低学年を中心に、登り棒や雲梯、鉄棒の「ミニ賞状」を発行してきた。また、前述のざおう英語活動と同様、第2学年以上の児童を対象にして、動画を撮影・公開してきた。令和3年度には、縄跳び動画を19本、鉄棒動画と一輪車動画は3本ずつの合計25本アップロードすることができた。

8 児童参画型「ミニ賞状」への発展

食育用「ミニ賞状」について、児童の主体性を伸張しつつ、集団に貢献できるよう「授与される側」から「授与する側への参画」へとリニューアルを遂げたのは令和4年1月であった。

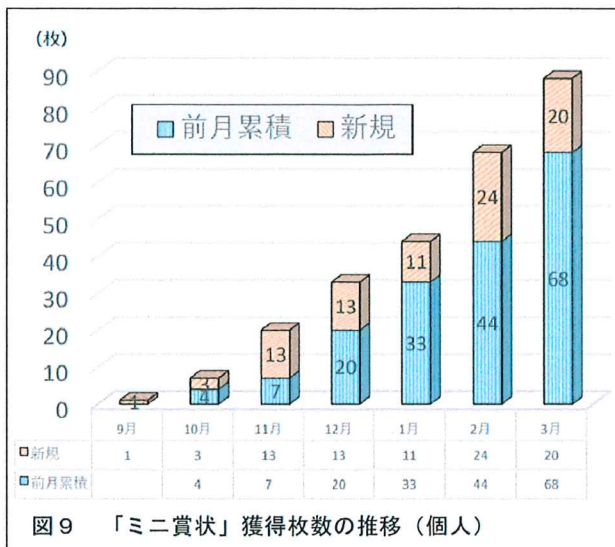
「おいしく楽しく食べたDe証」への挿絵を募集し、令和3年度に10種類を超えるイラスト入り「ミニ賞状」を発行することができた。図8は卒業記念給食にて発行した「ミニ賞状」であり、原画は、卒業を祝いたいという第4学年児童によるものである。



図8 児童のオリジナル・キャラクター「すだちちゃん」

9 ミニ賞状の獲得状況から

図9は、抽出児童（R3年度第5学年）が獲得した枚数の推移を示したものである（期間：令和3年9月29日～令和4年3月31日）。



新規の獲得枚数を見ると、学年末の2月と3月にその数を大きく伸ばしていることが分かる。自信がより確かなものとなり、最高学年への期待感を膨らませている状況がこのグラフから読み取れる。事実、令和4年度には児童会の役員として活躍中である。

10 まとめと考察

(1) アウトプットの重要性

本研究は、児童の行為・行動を評価するものである。ざおう英語活動を例にすれば、その出来不出来を問うのではなく、「発表した事実」を認め励ます取組である。同じく、5(3)①で取り組んだ国語科の学習では、校内放送を通じた発表を一度でも経験したことがある児童は、同様の機会を提示すると再度挑戦するようになっていった。このことから、まずは児童を発表の舞台に立たせること、教員はその舞台を用意することが必要であり、アウトプットを終えたならば、次時への意欲を優先して称賛することが何より大切である。

(2) 有効性の検証

「ミニ賞状」の有効性について、5の(3)で示した可視化や承認欲求の充足に関しては、その実証場面にざおう英語活動や食育諸活動を取り上げて論述してきた。また、学校HPにおける動画の掲載によって、保護者の喜びにつながるなど、「ミニ賞状」の効果の高まりに関する有効性を確認できた。

以上、児童の自己肯定感を高める支援の方法として、「快」の感情を呼び起こすことが可能な「手に取るこ

とができる具体物」を用いた賞賛は、「自分のよさの自覚」を促すものとして有効であり、「ミニ賞状」に限らず汎化できるものとする。

11 今後の発展性と期待

「ミニ賞状」は即効性のある「ご褒美」であるものの、慣れてしまうと耐性ができてしまい、効果が薄れてしまう危険性がある。当然ではあるが、「ご褒美」がなくとも「快」の感情の持続が望ましく、それこそが真の自己有用感を獲得した姿であろう。

小学校段階でいえば、第5学年までの取組として、児童の自己有用感を支え、最高学年に至っては、「ミニ賞状はなくとも、賞賛は自分の中にある」「自分には、正しいことを行う覚悟がある」といった自覚や自尊心が芽生えるよう、最適な働き掛けを行っていくことが大切であるとする。そのような力の源、将来にわたって生きて働く原動力が児童一人一人の中に湧き起こっていくことを期待している。

また、「アウトプット」との関連で省察すると、単に「表現の能力を伸ばすこと」ばかりをゴールにしないよう注意する必要がある。

「自分には伝えたいことがある」（内容）

「自分には伝えたい相手がいる」（対象）

「自分は伝え方を知っている」（方法）

自分の内側にあるものを言葉に乗せて、聞き手のために精一杯の力を発揮しようとする児童の姿を求め続けたい。そして、「君は、なかなか見所のある人間だ」「決して逃げることなく放送発表をやり遂げた」など、肯定的・共感的な態度で「ミニ賞状」を授与したい。高い能力のみを評価するのではなく、個々の中に隠れている力を引き出そうとする「ミニ賞状」でありたい。

〈参考文献〉

- 1 「応用行動分析で特別支援教育が変わる一子どもへの指導方略を見つける方程式」
山本淳一/池田聡子著 図書文化（2005.11）
- 2 「生徒指導提要」文部科学省（2010.3）
- 3 「小学校学習指導要領（平成29年告示）解説総編」
文部科学省（2017.7）
- 4 「学びを結果に変えるアウトプット大全」
樺沢紫苑著 サンクチュアリ出版（2018.8）